

2025 第11回 これからの建築士賞



「建築士」は日本の都市と建築にかかわる重要な職能資格であり、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注者など幅広い業務に携わりながら、未来につながる社会の実現のため努力してきました。近年では防災、環境、高齢化と人口減少、歴史文化の喪失など多くの課題の中で、その専門的な知見を生かしながら、魅力的な社会、街並み、建築空間の実現を目指して活動しています。

なかでも最近は他の建築関係の会とも連携し、それぞれの地域をベースにした協働も盛んになってきており、これらの新たな活動が大きな波となって地域社会の未来に力となる事も期待されています。多様な分野における建築士ならではの新しい動きに光を当て、顕彰し、支援するとともに広く世の中に伝えようとするのが「これからの建築士賞」の目的です。

審査結果

入賞6点(応募点数10点)

| | | | | | |
|---|-----|-------------------------------|---|-----|---|
| 1 | 業績名 | 深川えんみち -設計前後の介入 | 5 | 業績名 | 建築のまわりで、建築をシコウする。 アラウンドアーキテクチャーの取組み |
| | 受賞者 | JAMZA 長谷川 駿、猪又 直己、内田 久美子 | | 受賞者 | 佐竹 雄太 |
| 2 | 業績名 | Senju Motomachi Souko | 6 | 業績名 | 中中野プロジェクト 一能楽堂を核とした地域と文化のファシリティマネジメント |
| | 受賞者 | Ishimura+Neichi 石村 大輔、根市 拓 | | 受賞者 | なかなかの+梅若能楽堂研究会 |
| 3 | 業績名 | 郊外住宅地に潜む創造性をかきたてる | | | |
| | 受賞者 | 藤原酒谷設計事務所 藤原 真名美、酒谷 粽将 | | | 審査員による総評・講評および入賞作品の詳細は、こちらからもご覧いただけます。 https://tokyokenchikushikai.or.jp/award/pdf/korekara-vol.11.pdf |
| 4 | 業績名 | COMMON SENSE を生み出す場づくり | | | |
| | 受賞者 | 藤木 俊大、佐屋 香織 | | | 過去の受賞提案はこちらからご覧いただけます。 https://tokyokenchikushikai.or.jp/award/index05.html |

募集要項

1. 賞の対象

都市と建築に関わる近年の活動や業績で、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注など建築士としての多様な立場を通じて行った未来につながる社会貢献に対して、その活動・業績を担った建築士もしくはそのグループを顕彰する。未来につながる社会貢献とは、たとえば、美しい景観の形成、安全で魅力的なまちづくりや空間の提案、自然環境や歴史的環境の保全、地球温暖化・人口減少・高齢化社会に対する提案、弱者に対する対策、文化・にぎわい・コミュニティの創出、建築に関する啓蒙・普及など多様であるが、さらに、これからの建築士の仕事を開拓するような、従来の建築士の枠を広げる活動の応募も大いに期待したい。

2. 名称及び受賞数

これからの建築士賞 10点程度（但し、応募点数による）

3. 応募資格

原則として建築士もしくは建築士を含むグループで、活動のベースが首都圏にあること。過去の応募者の再応募は可とする。審査員が直接係った案件は応募対象から除外される。また、審査員が所属する事務所、グループが審査対象となる場合は、その案件に係る一切の審査から外れるものとする。

4. 応募方法

別紙候補推薦書に記入の上、必要に応じて参考資料をA4用紙3枚以内にまとめて、事務局まで提出のこと。関係資料は返却されないものとする。郵送、メールによるデータの送付も可能。候補推薦書は東京建築士会ホームページからダウンロード可能。自薦、他薦を問わない。

関連情報:話題の書籍

これからの建築士－職能を広げる17の取り組み

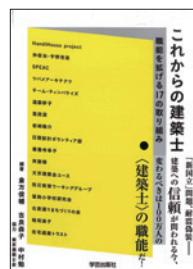
建築への信頼が問われる今、変わるべきは100万人の<建築士>の職能だ！

第1回これからの建築士賞審査結果を紹介した『これからの建築士－職能を広げる17の取り組み』(編著：倉方俊輔、吉良森子、中村勉 協力：東京建築士会)が出版されました。この賞の内容が詳しく掲載されています。

全国の書店・ネット書店で販売

定価：2,300円(税込)
発行：学芸出版社

<http://www.gakugei-pub.jp/>



総評文

青木 淳 (AS)

「これからの建築士」とは、つまりは、従来の建築士の職能を広げた建築士ということです。そこでまず、従来の建築士とは何かですが、これは建築士法でも設計又は工事監理を行なう者という位置付けで、「建築物の質の向上に寄与する」ことになっているものの、あくまで「建築物」の方を向いた専門技術者扱いで、残念ながら、建築を取り巻く社会の方への働きかけはほとんど期待されていないように思われます。これは、プロジェクトのより上流に関与して、社会の利益を守ることが期待されている、たとえば欧州の建築士像と著しい対照を成していて、例えば、英国では、RIBAが公式に認定する「クライアント・アドバイザー」という、社会や経済の側と建築をつなぐ媒介者としての職能が確立しているわけです。今年の応募は、応募数は少なかったものの、その点、建築というものの社会性をもって、建築士の領域を押し広げようとする活動がいくつも見られ、将来に期待が持てるものでした。問題は、その活動が職業として成立しているか、その活動の結果、建築的にすぐれたことが達成できているかですが、これは焦らず、それら活動がしっかりと育つのを辛抱づよく待つ必要があることなのかもしれません。



青木 淳(あおき じゅん)

1956年横浜生まれ／1982年に、東京大学大学院修士課程建築学専攻修了／1991年、青木淳建築計画事務所(現在、ASに改組)を設立、主宰／代表作に、「馬見原橋」、「湯博物館」(1999年日本建築学会作品賞)、「青森県立美術館」、「ルイ・ヴィトン名古屋・栄」、「大宮前体育館」、「三次市民ホール きりり」、「京都市美術館(通称:京都市京セラ美術館)」(西澤徹夫との共作、2021年度日本建築学会作品賞)など／2005年に芸術選奨文部科学大臣新人賞、2020年度に毎日芸術賞を受賞。京都市美術館(通称:京都市京セラ美術館)館長／東京藝術大学名誉教授
©前谷 開

大月 敏雄 (東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授)

建築士だから、業務としての建築設計で食べている、というのが前提となる。これまで考えられていた建築士の範囲を超えて、どんなふうに社会と接点をもち、建築の世界を広げていけそうか、ということが受賞のポイントだったと思う。応募資料を見ると、規定の設計条件に対応した計画・設計の幅を広げ、施主や事業主らとともに、まだ明示的ではない隠れた設計条件を探っていく、というスタイルが比較的多かったように思う。その手法も、いわゆるユーザー参加型のワークショップのようなものを超えつつあり、建築士自身が、ある時にはその環境の中に住み込み、あるいは、事務所や拠点を構えるという、古い社会学でいうところの「セツルメント活動」に近い中での活動が主流だ、ということがわかった。ただ、「これから」ということを考えた場合、多様なセツルメント活動の中でも、いくばくかを稼ぎつつ、持続性を担保することが必要でもある。建築設計・監理等業務委託契約以外の、どんな契約を社会と結びながら、建築士の幅を広げていくのか、建築士会としては、そのあたりも詰めて考える必要がありそうだ。



大月 敏雄(おおつき としお)

1967年福岡県八女市生まれ／東京大学工学部建築学科卒業後、横浜国立大学、東京理科大学を経て、2008年から東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授、2014年から同教授／博士(工学)・一級建築士／専門は、建築計画、住宅計画・設計、団地計画・設計、住宅政策／主著に『集合住宅の時間』(王国社)、『町を住みこなす』(岩波書店)、『住まいと町とコミュニティ』(王国社)など

貝島 桃代 (アトリエ・ワン／スイス連邦工科大学 チューリッヒ校建築振る舞い学教授)

「これからの建築士賞」の普及には、さらなる活動の必要が感じられた2年目の審査でした。昨年は賞の趣旨と合わない応募作品が散見されましたが、昨年の受賞結果と今年の応募告知を丁寧におこなったことで、今年は応募資料や作品内容、賞の意図を理解の上、質が高く充実したもののが揃ったことは大変嬉しく思いました。その一方で、応募作品数が減ったことは、残念でした。OMAのレイナ・デ・グラフは現代社会で、建築の賞が乱立し、政治や産業の道具になっていることについて批評的に見ていました。この賞が、実質的な社会的波及効果をもたらすには、選考結果だけではなく、賞の発表や受賞講演会、展覧会、作品の見学会、審査員との対話あるいは賞金など、具体的な建築文化の普及の形が見え、これに応募することが応募者自身の活動動機となることが求められているのではないかと思われました。また賞を育てるには、審査の透明性も重要ですが、審査員の関わり、継続的な議論、そして責任範囲の検討も必要であると思いました。私自身、審査員期間中、十分な成果を残せなかつたことが心残りですが、今後の賞の充実と発展をお祈りしております。2年間、ありがとうございました。



©石渡 朋

貝島 桃代(かいじま ももよ)

1969年東京都生まれ／1991年日本女子大学家政学部住居学科卒業／1992年塚本由晴とアトリエ・ワン設立／1994年東京工業大学大学院修士課程修了／1996～97年スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETHZ)奨学生／2000年東京工業大学大学院博士課程満期退学／2000～09年筑波大学講師／2009～2022年筑波大学准教授／Harvard GSD、ETHZ、The Royal Danish Academy of Fine Art、Rice University、TU Delft、Columbia University GSAPP、Yale School of Architectureで教鞭をとる／2012年RIBA International Fellowship／2018年第16回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館キュレーター／2022年ウルフ賞芸術部門(建築)受賞／2017年よりNPO法人チア・アート副理事長、2024年同理事長／2017年より、現職 ETHZ Professor of Architectural Behaviorology

宮崎 晃吉 (株式会社HAGISO代表取締役)

建築士の専門性を司る建築士会において、建築やまちづくりを「建築士に限らず、誰しもができる」と取り組むべきこと」とするための取り組みを評価することは、一見危ういように見えるかもしれない。しかし分業化が極限まで行き着いた現代において、閉じた専門性を開いていくことはむしろ死活問題であると思える。建築に限らず、現代のわたしたちは生活のあらゆる側面を外部に委託している。それぞれの委託先の専門家は、素人は口を出すべきでないとその専門性を守ってきたが、結果我々生活者は自分たちでは何もできなくなってしまった。その外部依存状態こそがいかに危ういものであるか。今回の審査では、限られた数の応募の中ではあったものの、粒ぞろいの取り組みばかりであった。アプローチは様々だが、自分たちのできることと地域や社会との偶然の出会いを糧に、等身大で取り組んでいる。分け隔てなく一緒に汗をかいている。自分たちでも、この取り組みの結果どこにたどり着くかは必ずしも分かっていない。分からぬからこそ、そこに未知の可能性があることを信じられるのであると思うし、その道程こそが面白い。それで良いのだと思う。



宮崎 晃吉(みやざき みつよし)

群馬県前橋市生まれ／2008年東京藝術大学大学院修士課程修了後、磯崎新アトリエ勤務／2011年より独立し建築設計やプロデュースを行うかたわら、2013年より、自社事業として東京・谷中を中心エリアとした築古のアパートや住宅をリノベーションした飲食、宿泊事業を設計および運営している／hanareで2018年グッドデザイン賞金賞受賞／ファイナリスト選出など

1

深川えんみち - 設計前後の介入

福祉の“壁”を乗り越え、閉じた施設を地域に開く



JAMZA

長谷川 駿(中央)
猪又 直己(左)
内田 久美子(右)

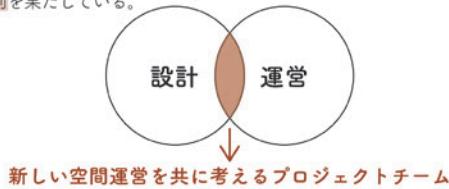
■暮らしの観察を手がかりにプロトタイプを解きほぐす

多様な価値観が混在する時代、建築空間はひとつの用途に縛られる箱であってはならない。私たちは、人々の活動や体験、暮らしをつぶさに観察することを通じて、これまで作られてきたプロトタイプを解きほぐし、混ぜ合わせ、開いていくことで、人々が活き活きと地域の中で生き、新たな関係性が生まれていく空間を思考している。本プロジェクトは、多世代共生の複合型福祉施設を計画したものである。これまで福祉施設は、安全を求めるあまり、管理を重視し、世代ごとに隔絶され、地域から閉ざされてきた。『多世代が集い、交わり、地域に開かれた場をつくる』という思いを運営者と共にし、その実現のために、私たちは主体的に運営に踏み込んで関わり、福祉の「壁」を超えるべく、プロジェクトを導く役割を担っている。



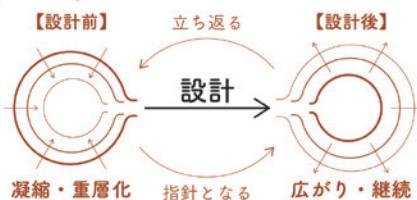
■壁を乗り越え、施設を開くための2つのプロセス

1つ目は、設計者と運営者が対等なチームとなり、初期段階から密接に関係し合いながら共に進めること。運営者の考え方が空間に大きく影響する福祉施設の計画において、地域へ開くという不確定要素を包含する計画は、ともすると簡単に壁を生み出してしまう。この課題に対し、コンセプト立案から空間、家具等のディテールに至るまで、空間と運営をセットで考えることで、ビジョンを空間に確実に落とし込む役割を果たしている。



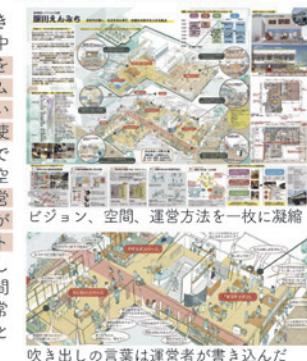
新しい空間運営を共に考えるプロジェクトチーム

もう1つは、建物を設計する前後におけるアクションである。これまでの施設とは違う新しい空間・運営を実現するために、設計前の企画段階でビジョンを深く共有し、常に立ち返ることができる軸としてまとめると共に、竣工後においては建物の取り組みを内外へ伝え、常にフィードバックを得ながら、理想的な状態を維持し、進化させていく試みを行っている。



【設計前】時間軸を凝縮・重層化し、活動を描き切る

運営者や利用者の想いを聞き取り、それを1つの空間の中で実現するために、各事業を要素分解・再構築し、タイムシェアにより時間ごとに使い方を変えながら空間全体を使いこなす計画を考案。そこで想像したアクティビティや空間の使い方を描き切り、運営ビジョンと空間イメージがセットとなったコンセプトシートを運営者と共に作成した。このシートが、設計期間中も、竣工後においても、常に立ち返るプロジェクトの軸となっている。



【設計後】空間を維持し、より拡げていく

街や人を育していくことがプロジェクトチームの目標であるため、竣工は1つの区切りでしかない。竣工後も設計者として継続的に介入しながら、地域に開き、取り組みがより広く拡がっていくこと、そして運営される方が日々前向きに運営できる環境を実現するために、当事者として伴走し続けている。



【利用者にコンセプトを伝える】

運営スタッフや本棚オーナーの地域の方に建物のコンセプトを伝え、建物を語ってくれる人を増やし、運営にも繋げてもらう。

【定期的に見学ツアーを開催し、空間と運営を拡げる】

建築・福祉関係者向けの見学ツアーを設計者・運営者共同で毎月開催し、取り組みを全国に伝えつつ、客観的な視点を得る。

【日常的なメンテナンスを先導する】

施設感の払拭のために自然素材を用いており、日々の手入れは必要。運営者や利用者、地域住民とWSしながら空間を維持する。

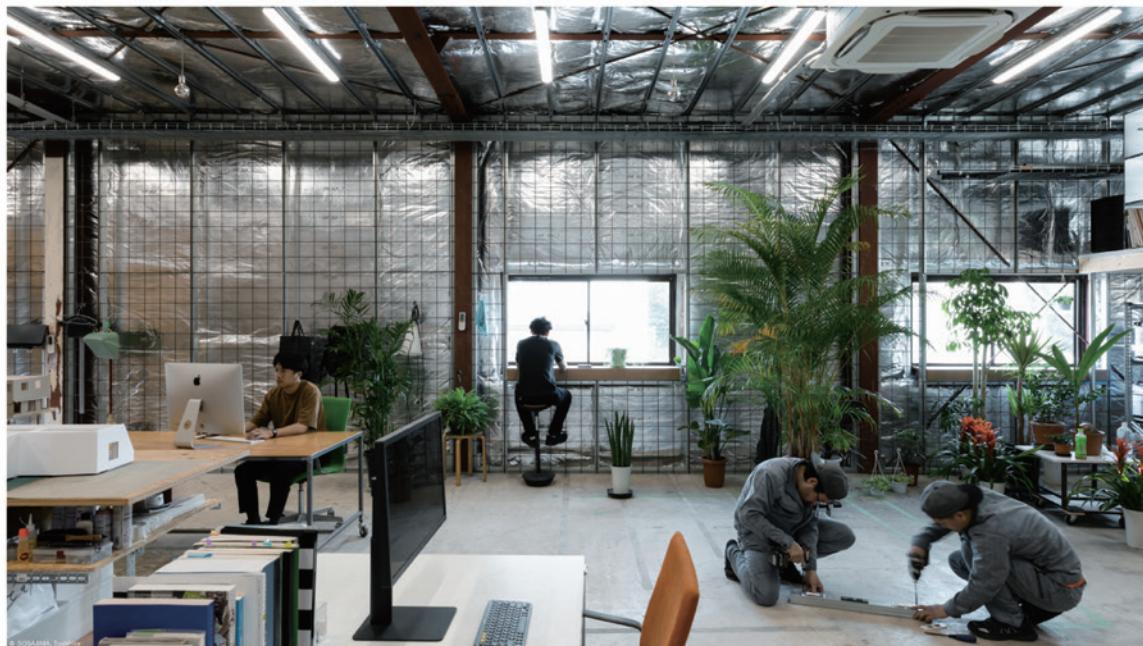
深川えんみち
JAMZA
長谷川駿、猪又直己、内田久美子

ここでは、複合型の福祉施設プロジェクトにおける、運営者と初期段階から一貫して密接に関係し、コンセプトシートを作り、これをもって助成金に応募し、獲得、竣工後は利用者へのコンセプト伝授、見学ツアー、日常的なメンテナンスなどを行なっている建築士の立場が、応募対象となっています。審査では建築士が設計建設の前後も含め、プロジェクトに長く関わることで、活き活きと使われている持続的な建築となっていることが高く評価されました。その一方で、そうした活動は、ボラ

ンティア活動あるいは建築士としての仕事として行なわれているのか、持続的な仕組みが示されていないことが課題としてあげられました。産業の歯車から自律し、建築の文化を耕すこと、それにはいろいろな工夫が必要です。もしそれをすでに見つけているのであれば、この賞で、建築士の生き方として皆に共有してほしいし、まだ過程であれば、ぜひこのことに挑戦してもらいたいと思いました。

貝島 桃代

2

Senju Motomachi Souko
Ishimura+Neichi / 石村大輔、根市拓Senju Motomachi Souko
Ishimura+Neichi 石村大輔、根市拓

Senju Motomachi Souko

1. 倉庫を再定義する

Senju Motomachi Souko は、足立区・千住元町にある倉庫を電気施工会社から依頼を受け、2019年頃から改修が始めたプロジェクトである。次第に設計者である私たちも共にここを事務所として使いながら改修を進めることになった。施主の電気工事の技術で可能な方法や余剰資材の転用など、ブリコラージュの手法で改修を重ねた。やがて施主との協力や地域での仕事が広がり、この倉庫で制作したものを納品したり、端材を再利用することで資材や人の流れが街へとつながり、倉庫は資源の拠点として機能している。現在はこの場所の多様な仲間と会社組織を立ち上げ、分野を越えてプロジェクトを展開中である。倉庫を街の一部として位置づけ、活動や資材を仮置きしながら、東京の中に独自のローカリティをつくりしていく。



2. 関係性の中に「仮置き」をする

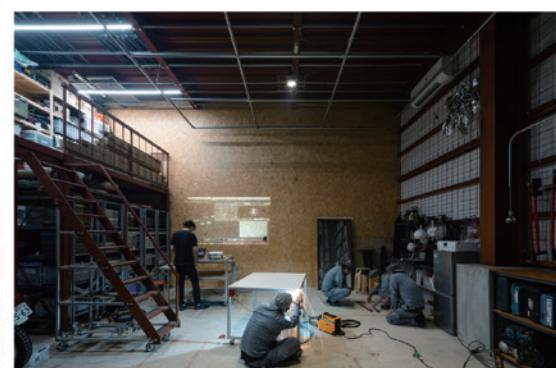
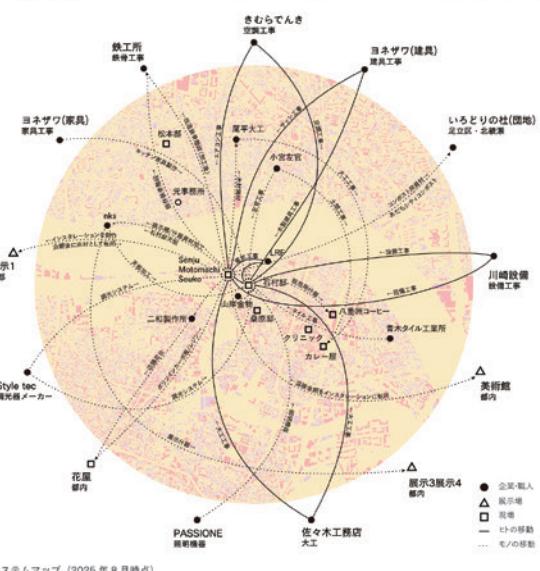
この場所でつくり考える過程で生まれる試行錯誤や素材の断片が次第に集まり、その資材が設計の手がかりとなる。その際に大切なのは、常に分解可能な状態で仮置きすることである。つくられたモノも再び転用や取り外しができ、建築は愛し続けられ、形の有無を問わざず「仮置き」されたスティックとして扱われる。そうしてつくれたモノは転用の可能性を持ちながら、職人たちとの大喜利のような掛け合いを通して更新されていく。設計と施工の区分は場所の性質上あいまいになることも多く、またこの建築を通して生まれた施工者との自立共生的なネットワークとその関係性の中でつくれたモノは、この場所に仮置きされたり、別の場所に形を変えて循環している。單一で、決して公的な建築ではないながらもダイナミックな運動体として人とモノを巻き込みながら、これまでの設計と施工の枠を超えたつくることの自由なあり方を可能にする土壌を耕していくことにもつながる。



制作したアーティストの作品を床材として転用。
検証用のメッシュを壁に転用、取り外して展示作品の一部に再転用。

街場の電気施工会社の社長との偶然の出会いをきっかけに、必要最低限の資材と、そこにいるメンバーで無理なく作れる技術を駆使しながらともに拠点を作っていくプロジェクト。請負プロジェクトの「商品」として使われた材料が巡り巡って自分たちの空間をつくる「資源」となったり、拠点の設えとして使われていた部材が一時的に借り出され「商品」となったりするなど、ものの循環がいたって自然に行われてい

Ishimura+Neichi



る。建築部材や材料は建築に設えられることでその使命が確定したように思いがちだが、実はいっときそこにあるだけで、その可能性は常に保留されている。そう思えば世界はすべて倉庫のようなものであり、翻ってこの「Senju Motomachi Souko」が地続きな拠点であることが再認識できる。

宮崎 晃吉

3

郊外住宅地に潜む創造性をかきたてる
藤原酒谷設計事務所 藤原真名美、酒谷粹将

郊外住宅地に潜む創造性をかきたてる



f-s 藤原酒谷設計事務所

酒谷 粋将 藤原 真名美

スタッフ（荒川 香花 大内 慶）

私たちは、建築やまち、そして暮らしをつくることは建築家だけでなく誰もが関わるものであり、専門家以外の人々とも協働して取り組んでいきたいと考えています。そのため、まちの人々が自ら豊かな暮らしを築こうとするマインドセットや、それを支えるスキルを育む工夫を重ね、共に空間づくりを実践することを大切にしています。こうした活動を通じて、人々に建築やまちへの新たな視点を持ってもらうと同時に、私たち自身も一人では到達できなかった領域へと視野を広げ、新しい見を得ることを目指しています。

私たちの拠点は、横浜駅から電車で20分の郊外住宅地・金沢文庫にあります。徒歩15分圏内に暮らしと仕事の場を持ち、居住の場ではマルシェを、仕事場ではコーヒースタンドを、近所では空き家の改修を、さらに息子の通う保育園では広場づくりを行ってきました。どれも自分たちの生活に直結した行為であり、顔なじみの地域の人々と協働することで、日々の暮らしのものが豊かになっていると感じています。

私たちが大切にしているのは、建築やまち、暮らしを自らの手で形づくる面白さを伝えることです。モノづくりの敷居を下げ、「自分の意識と行動次第で家やまちは変えられる」という感覚を協働する人々と共に共有していきたいと考えています。

② 空き家を改修しシェアハウスと地域交流拠点を運営 こずみの ANNEX



すぐに始まった改修、けれども現在も未完成

築50年の空き家を見て、「いろいろな人と一緒に時間を作り替えていくことが、地域に良い刺激を与えるはず」と空き家改修プロジェクトを開始。地域住民や学生と共に最小限の改修をし、半年後にシェアハウスが始まりました。自分たちの手で暮らしを変えていこうという考え方のもと DIY の WS を多数開催しています。

地域とのつながり・地域への貢献

リビングは地域のみんなの「離れ」にして開放しています。運営メンバーは現在12名で、日々の見守りやイベントの開催をしています。イベントを通じて地域の人と話す機会ができ、顔の見える関係が広がってきました。また自分たち自身が「ANNEX」を使って見せることによって、「こんな使い方もあるんだ」という新しい住宅地の空間活用の認識が地域に浸透していっています。



④ 金沢区内のお店や地域拠点での合同イベントを開催 めざせ!!金沢区の日



自らの手でまちを豊かにするマインドの醸成

地域内の活動主体と協力して「めざせ!!金沢区の日」というイベントを企画しました。区内の飲食店や地域活動団体などがそれぞれの创意工夫を凝らし、独自の方法で金沢区の誕生日を祝い、区民が金沢区の知られざる魅力に触れるとともに、「金沢区のまちをより豊かな環境へとつくり変えていこう」という区民自らの創造的なマインドセットを醸成することを目指しています。

どんどんつながる区内のネットワーク

区内のお店による当日限定メニューや特別割引、マルシェやワークショップといったイベント等、「金沢区の誕生日を祝う」という共通のメッセージを掲げ、多彩な主体が連携できる仕組みをつくりました。これまでに3回開催し、いまでは67のお店や団体が参加するビッグイベントになりました。



横浜市の最南端に位置する金沢区。

金沢文庫駅西口の金利谷東地区を中心にして5年をかけて金沢区全体にネットワークを広げてきた。

居住していた事務所兼賃貸住宅のアパート「八景市場」の奥で、オーナーの平野健太郎さんと協力してマルシェイベントを開催。

郊外の住宅地で、しかもコロナ禍、集客できるか不透明だったが、近隣の多数の飲食店舗の協力を得て、2,000人を超える来場者が大盛況となった。

① 2020 マルシェ開催 ENJOY LOCAL! 八景市場



元幼稚園の事務所は常に窓を開けて、模型や打合せの様子が外から見えるようにしている。典型的な住宅地のなかに突如コーヒースタンドが立ち現われる。普段出合わなかった設計事務所とまちが一杯のコーヒーを介して接点を持ち、道行く人がコーヒーを片手にまちを歩く、少しだけ豊かな暮らしの風景が生まれている。

⑤ 保育園の園庭の一部を地域に開いたひろばに改修 あおぞらひろば



地域の中で子育てをする

酒谷のバンドメンバーであり、息子が通う保育園の園長先生と、地域と連携した新しい子育て環境について約一年をかけて議論を重ねました。子育てが保育園の枠組みを超えて「まちで子どもを育てる」ことが、まちにとつても大きな意味を持つという考えに至り、保育園と地域の境界である園庭の隅っこを地域に開いた広場に改修することになりました。

大人と子ども双方の自慢で設計を進める

地域子育ての場所をつくるにあたって、子どもたちの場所、大人たちの場所を子どもも大人も一緒に考えました。子どもの視点で見た広場は椅子や机といった形におさまらない、なんだかわからないけどきっと楽しそうな空間で溢れ、そのアイディアを取り入れながら設計を進めました。



もともと縁もゆかりも無かった土地で、地権者との出会いを通じて空き家や未利用空間を使って地域住民とともに進められているプロジェクト。コロナ禍ではじまったという時期からも、建築士としてというよりも、等身大の必要に駆られてはじまったプロジェクトであることが察せられる。まずは小さな出来事からでも、始めてみるとその出来事がきっかけとなっ

て「芋づる式」に出来事が連鎖していくのは私も大いに共感できるところ。そんな偶然を受け入れる構えと時間への向き合い方を持ってすれば自分たちの知らないところまでその余波が届くことを証明してくれている好例であると評価された。

宮崎 晃吉

4

COMMON SENSE を生み出す場づくり

藤木俊大、佐屋香織

COMMON SENSE を生み出す場づくり

ピークスタジオ一級建築士事務所 藤木 俊大 + 佐屋 香織

**PEAK STUDIO**

地域と並走しながら価値をつくりだす
武蔵新城エリアリノベーション

2016.04～2024.05



独立して2年目となる2016年より武蔵新城に拠点を移し、住宅が多く建ち並ぶエリアの中で設計活動を開始しました。私たちが入居していた築45年の賃貸住宅「第六南荘」はもともと空室率が高く、あと数年で取り壊す予定の建物でした。入居時に敷地と道路を区切っていたブロック塀を撤去し、バルコニー側からアクセスできるように改修しました。すると、住むだけであった場所に店舗があり、小さな複合施設へと変化。さらに外構を「ダイロクパーク」として公園化し地域に開くことで、入居者以外も気軽に訪れるようになりました。そして、ここでの活動は設計にとどまらず、地域のイベントへの出店、ポスター制作、ワークショップ開催などをしながら、地域の人々やオーナーのマインドセットを更新。地域コミュニティの拠点となるカフェ「新城テラス」、働くと暮らすを豊かにするワークスペース「新城WORK」など、街の中の小さな居場所をつくる設計に関わりながら、漸進的に小さな開発を重ね、オーナーに並走する形で約8年間わり続け、エリアの価値をつくってきました。

コミュニティから公共へ
TACHIBANA HUT 2024.06～



2024年6月から、川崎市の橋公園にてParkPFI事業を開始しました。事業対象とした公園は、総面積17,496m²の中にも遊具ゾーンやグラウンドなど多様な場所を持ち、様々なニーズに対応可能な近隣公園です。公園自体は魅力的であるものの、公共交通機関によるアクセスは悪く認知度の低さもあり、エリア外からの利用を多くは見込めませんでした。その一方で、地域利用が多いことを特徴・強みと捉え、ローカルのニーズを充足させる事業を考えることで、現在の利用者の満足度を高め、また、橋公園での新しい活動を生み出すことで、持続可能な事業の主軸を作り、好立地でない公園でのParkPFI事業のモデルケースとなると考えました。そこで我々は「地域活動のプラットフォーム」を川崎市にプロポーザル提案し、採択され、設計事務所自身で運営管理を行なっています。開所後は、多様な人が集まる公共空間として、みんなが気持ち良いと思う共通感覚(COMMON SENSE)を意識しています。COMMON SENSEを生み出す上で必要なことを「場を育てること」「チームを育てること」「愛着を育てること」とし、建物の整備、チームづくり、イベント企画を連携しながら続けています。具体的には、長く使われていなかった公園管理事務所を自ら改修し、1階にレンタルスペース・シェアキッチン・会議室・POP UP SHOP、2階にコワーキングスペースと管理事務所として設計事務所を入れました。訪れた人が使用できるようなプログラムを多く入れたことで、細かなニーズに対応できる小さな複合施設を目指しています。また、我々だけでは運営しきれない部分を地域の方やボランティアメンバーに手伝ってもらなが、花の水やりやゴミ拾いを分担しています。そして定期的なイベント開催を行い、地域の方々の参加を得られ、継続的に開催できる兆しが見られました。イベントごとにアンケートを実施、「公園をよくするために必要なこと」をポストイットに書いてもらい、意見を集めました。この中から実験的にでも始められる「公園を育てる」取り組みについて「STUDY」という名目で少しづつ進めています。



内外を繋ぐフレーム庭、公園道具をデザインモチーフとした



大きな開口が広場から人を引き込むレンタルスペース



地域で活動している方が出店できるPOP UP SHOP



多様な働き方、学習等に使用できるコワーキングスペース

川崎市武蔵新城エリアで活動を開始した設計事務所が、入居する建物のオーナーと一緒に、部屋の改修から外構の改修といった小さな建物内外のリノベーションを、隣接・近接する場所で7年ほどエリアリノベーションを実践した。こうした設計事務所が、今度は川崎市の橋公園を対象とするParkPFI事業の事業主体となり、地域活動のプラットフォームを市に提案し、設計事務所自体がその管理運営を担うようになった。長

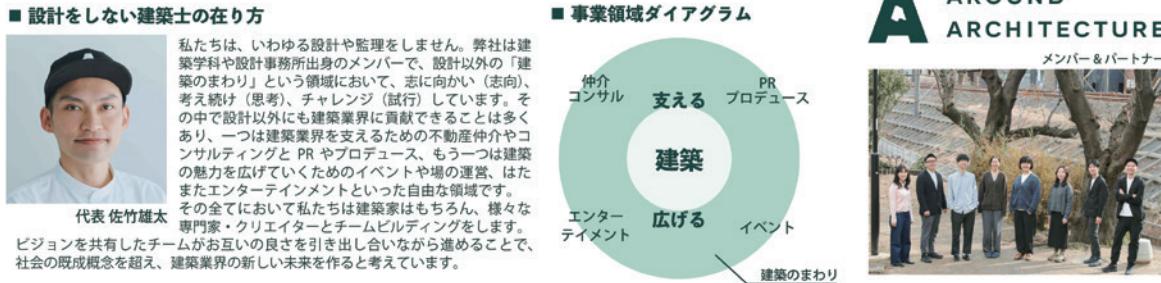
く使われていなかった公園管理事務所を改修し、小さな複合施設とともに、その2階に管理者兼設計事務所として入居しながら、公園の活性化を担う。設計事務所ならではの、責任あるエリアリノベーションへの展開例として高く評価したい。

大月 敏雄

5

建築のまわりで、建築をシコウする。アラウンドアーキテクチャーの取組み。

建築のまわりで、建築をシコウする。
アラウンドアーキテクチャーの取組み



支える不動産仲介＆コンサル



1. 大宮氷川町家 (2025)

乾久美子建築設計事務所設計の全三戸の小規模な複合施設。弊社は初期提案時から建築家とタッグを組み、市場調査から不動産企画、戦略の立案をし、事業性を担保しながら建築家設計での付加価値の創出を目指した。このように建築と不動産のチーム体制を初期から構築することはとても大事であります。多くのケースでは不動産企画が終わってから、それを実現する役として建築家に手が掛かることになる。その進め方では、企画や戦略に建築家の価値(信頼)が入っていないものである。また我々の役割はその価値を金融機関や投資家に伝えていく橋渡し役であり、相手側の専門知識や考え方を理解しているからこそ、ツボを押さええて上手く伝えることが出来る。そして、それらは建築が出来てしまえば傍からは見えないが、そもそも実現するかしないか自体を握っている。

設計：乾久美子建築設計事務所設計



1



©Yurika kono



3

広げる エンタメ・イベント・場の運営



5. フードトーキフェス (2024-2025)

食×建築がテーマのイベント。誰にとっても身近なく「食」と、専門性の高い「建築」をかけ合わせることで、「おいしい」を入口に建築を知るきっかけをつくり、建築の世界の豊かさと文化をより多くの人に広げていくというビジョンを掲げ、2024年から年に1度のペースで過去2回開催。下北線路祭の空き地にて、建築家が運営しているお店のフード出店はもちろん、建築に関わる展示やワークショップ、トークイベントやクイズなど盛り沢山のコンテンツに今年は2000人以上の来場者が訪れ、大人も子供も楽しめた。

協同： studioTRUE



6. 建築ラップ (2016)

代表の佐竹が建築を題材にし曲を作りて歌う「建築ラブ」。建築家の名前だけが歌の「architect」や、工務店とラボし現場監督自身も歌「SEKOH GA DAIZI(施工が大事)など多彩な曲で建築に興味をつききっかけを作る。

7-AA マップ (202)

建物全体はもちろん内装を建築家が設計したお店をイラストで紹介した MAP。建築に興味がなくても楽しめることを前提に、建築家設計の美味しいお店や素敵な物販店、ホテルやギャラリーなど東京全域より 20 店を独自に選び紹介。



8. コーヒースタンド (2022-)

佐竹雄太さんは、「創造系不動産」でリーダー的存在として経営や事業開発に深く関わった後、2021年に「アラウンド・アーキテクチャー」を設立し、今に至っています。建築士というスキルを活かして、建築と社会の間を媒介することにおいては、創造系不動産での活動と連続しているけれど、前者では不動産実務を建築的に拡張するという立場にあったのに対して、現在は逆に、建築を社会に広げるという立場にシフトして

いることが特筆されます。設計はしない。事務所名が示すとおり「建築のまわり」にあることに徹して、さまざまな方面から建築を支え、広げる活動を行い、すでに「大宮氷川町家」など、大きな成果を上げられていて、その軽やかなステップで、日本型の建築士の職能の拡張をさらに進められていくことを期待しています。

青木淳

6

**中野プロジェクト
—能楽堂を核とした地域と文化のファシリティマネジメント—**

中野プロジェクト**—能楽堂を核とした地域と文化の
ファシリティマネジメント—**

2022年東京都中野区にある能楽堂オーナーとの縁をきっかけに、能楽堂のある敷地内で「なかなかの」というカフェバーをはじめた。東中野と中野坂上のちょうど真ん中にある「中野」と名付けたこのエリアは、他の中央・総武線沿線エリア（高円寺、荻窪、大久保等）に比べて特徴がない場所であった。能楽堂の存在を地元住民でも知らない人が多く、立地の利便性から通勤や通学のために住むことを選択している人も多い。そのような都市における帰属意識を持ちにくいまちで、地域の文化的資源をまちに接続し新たな地域特性を生みながら、カフェを媒介とした地域コミュニティを育むことで、「中野」というまちが人々の居場所として浮かび上がることを期待する。

なかなかの

物井由香 + 加藤麻帆 + 伊藤隼平 + 城李門 + 井原麻衣

梅若能楽堂研究会

物井由香 + 伊神空

地域資源としての能楽堂**■能楽の「学校」としての梅若能楽学院会館**

梅若能楽学院会館は建築家・大江宏によって1961年に建てられた。用田地域上の制限で劇場をつくることができなかったこともあり、能楽の「学校」として建てられた能楽堂は、月に一度の能の定期公演に加え、現在でも日々お稽古するために生徒さんが能楽堂に通っており、学校として歴史が続いています。

■建築家・大江宏による「混在併存」のはじまり

その後、国立能楽堂を含む多数の能楽堂を手掛けることになる建築家・大江宏による初の能楽堂建築であり、天井や柱の装飾など随所に木を用い、構造体のコンクリートと対比しつつ調和して空間を構成する手法は、構造を純粹に表現した当時の建築界の潮流のなかでは斬新な試みであった。これは、「混在併存」といわれる大江の設計思想の萌芽ともいえ、木の象徴的な用い方によって「間」を生み出し、大江独自の空間的奥行きと時間的要素が一体となった建築を実現している。

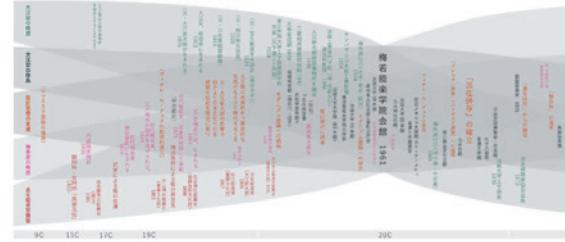
**歴史・文化を読み解く****■梅若能楽堂研究会**

梅若能楽堂研究会は、まちと梅若家の敷地全体の歴史と、建築作品としての梅若能楽堂の調査を中心に、中野プロジェクトの「時間軸を組み立てる」リサーチ活動を実践している。

2024年春の活動開始以降、継続的なリサーチに加え、梅若能楽堂を建築的視点から一般向けに解説する建築ツアーを行なっている。

現在はその視点を未来に向け、継続的な関係者との対話・提案で建築文化的な予防保全の視点をこの敷地に取り込もうとしている。

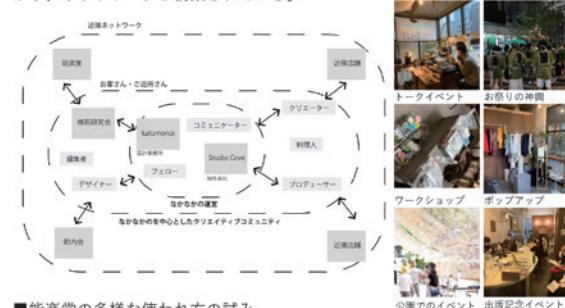
5つの視点の交わりから見る大江宏と梅若能楽堂

**入り口をつくる****■入り口としての「なかなかの」**

能楽堂のある敷地は、山手通り沿いに建つ大きなビルの陰にあり、緑に覆われ、山手通りの喧騒を忘れるひっそりとした神聖な雰囲気のある場所である。大きな敷地内に能楽堂だけでなく、鉄筋コンクリートの現代的な住宅、増築を繰り返した木造邸宅、10階建てのマンション、幅の広い外階段、祠のある庭、レース橋のいる小屋がバラバラと配置されており、都市の中で異質な雰囲気を纏っている。私たちが運営する「なかなかの」というカフェバーは能楽堂の入り口に位置するマンションの1階にある。カフェにふらっとやってきたお客様に能楽堂の話をすると、長年近所に住んでいても知らなかった人が多いということを知る。公演前には待ち合わせのお客さんや、公演後には高まった気持ちを消化するために人々が訪れることがある。カフェという存在が、生活から少し遠いところにある能楽堂と、日常としてのまちをつなぐ入り口になっている。

**まちにひらく****■ネットワークの構築**

「なかなかの」を運営していく中で、多種多様なイベントを日常的に開催するようになり、するとイベントをやっている店として認識され、何かを始めたいという人が集まるようになった。イベントと一緒にやることによって、店とお客様という関係を超えた繋がりができるたり、近隣の店舗と協力したり、まちのイベントに呼ばれたり、さらにはまちの公園を使った大きなイベントを企画し開催したりするようになり、店の中から始まったことがまちへと広がり、ネットワークが構築されている。

**■能楽堂の多様な使われ方の試み**

なかなかのを中心としたクリエイティブコミュニティを通じて、さまざまな文化的活動を行う個人をつなぎ、能楽堂にて多様なイベントを開催している。



応募者の内訳は、カフェバー運営メンバー5人（設計事務所と企画・編集の制作会社スタッフ）と、大江宏設計の梅若能楽堂を研究する2名。応募者からの資料によると、「メンバーの親族が能楽堂オーナーと知り合いで紹介を受け、独立したばかりのkatomono（設計事務所）が、初めはオーナーの建築まわりの御用聞きをしていました。」その延長として、能楽堂敷地の一角に

建設するマンションのテナント探しをしていた際、一層のこと自分らでカフェバーを運営しようということになった。若い建築士たちが、建築という共通言語を基盤に、テナントサイドとして、研究者として、活動拠点を自ら形成しながら、町と建築の応援団を形成するモデルとして評価できる。

大月 敏雄